Mariä Himmelfahrt im Sonnenschein, gibt es reichlich guten Wein.

——『シュタイアーマルクの農民暦』にみるオーストリア人の季節感について

富　山　典　彦

一　はじめに

いまさら言うまでもないことだが、オーストリアはカトリックの国である。ヨーロッパの文化と関わって生きている人間として、キリスト教というものについてある程度の知識はもっていたつもりだったが、娘をウィーンのカトリックの私立小学校に入学させ、その学校の年間行事を通じてカトリックの教育というものに実際に触れてみると、これまで私が漠然と抱いていたイメージには、あるおおきな欠落があったことに気づいた。ローマ法王を頂点とし、きわめて膨大かつ精緻な神学の体系に支えられたカトリックの構造というイメージは、間違いではないとしても、はなはだ一面的な見方であり、ゲルマンやケルトといった異教の遺物を一方で破壊しつつ、他方で巧みに取り込んでいったカトリックのいわば民俗的要素が、ウィーンのような都市にあっても、なおその文化の基底で命脈を保っていることに驚かざるをえない。

カトリックというものを一本の植物に喩えるなら、この植物の花については、書物を通じてこれまで、私なりにある程度の知識を得ていたつもりだったが、その植物の茎や葉や根についてはもちろん、その植物の育つ気候・風土や土壌については、これまでほとんど顧みる機会を、私はもたなかった。それはなにも、私ひとりの不明というわけではなく、たとえば、「ゲーテ時代の自然」と言ったときに、その「自然」が生きた自然というよりはむしろ文学作品、あるいは文学という理念のなかにある観念としての「自然」を考えてしまうわが国のゲルマニスティクのあり方の結果と言えなくもない。

神道と仏教の信者の数を合計すると、統計的には人口の一、五倍をゆうに越えてしまう[1]一方、キリスト教の信者数は、カトリックとプロテスタント諸派を合わせてもわずか一パーセントを数えるにすぎないわが国にあって、「キリスト教を芸術的に愛する」と言った芥川龍之介のあの有名な言葉が象徴するように、カトリックという植物が育つ気候・風土はもちろん、その土壌についての知識の欠落が、私のような浅学な日本のゲルマニストに起こっても、なんの不思議もないのである。

たとえば、ヨーゼフ・ロート Joseph Roth の代表作である『ラデツキー行進曲』（一九三二）*Radetzky-marsch* に、次のような場面がある。「少尉（＝カール・ヨーゼフ・フォン・トロッタ、筆者注）に世界の没落の暗い予感が襲いかかった。彼は聖体の祝日の行列のきらびやかな輝きを思い出した[2]」。帝国の象徴的存在であるフランツ＝ヨーゼフ一世が先頭に立つこの日の行列は、オーストリアの国家的年中行事のなかでも、もっとも晴れがましいもののひとつだったということだが、そもそも聖体の祝日とは何であり、トロッタ家三代の物語、それにオーストリア帝国の没落と、それはどのような関係があるのか。

あるいは、ヒトラーの治療をした医師として日本では誤って紹介されている[3]エルンスト・ヴァイス Ernst Weiß の最後の作品『目撃者』（一九六二、死後刊行）*Der Augenzeuge* では、馬に蹴られて大怪我をした主人公が、傷が癒えた後、母親と二人でマリアツェル Mariazell を訪れる。この旅がこの作品ではきわめて重要な転回点となっている[4]のだが、このマリアツェルとは、そもそもどういう場所なのだろうか。

このような素朴な疑問を、私はこれまであまり重要視してこなかった。『ラデツキー行進曲』にせよ『目撃者』にせよ、考察すべき問題はほかにもいろいろあったからだ。ペーター・ローセガー Peter Roseg-

ger のような「郷土文学」Heimatliteratur と呼ばれるジャンルの作家は、作品世界の舞台となるオーストリアの一地方の民間信仰や風俗・習慣といったカトリックの民俗的要素を、意図的に作品世界の重要な構成要素として取り入れているが[5]、郷土文学でもカトリック文学でもないロートやヴァイスの場合にも、作品世界を織り上げていく糸のなかに、これらの要素が微妙に入り込んでいる。しかしながら、それを解きほぐす作業にまで、なかなか手が回らなかったというのが、これまでの私の実情であった。

これまで、どうしても希薄にならざるをえなかったこのような問題意識を、今後少しでも掘り起こしたいと考えているが、民俗学者でも宗教学者でもなく「ドイツ文学者」である私にとって、オーストリアのカトリックの民俗的要素そのものの内実を研究することはほとんど不可能である。しかしながら、ある作家がある作品を書くという、きわめて個別的で特殊な行為のなかに、『ラデツキー行進曲』や『目撃者』の例で示したように、カトリックの民俗的要素が混入しているとすれば、そういうものに対する目を少しでも開いていくことこそ、私にとって今後のオーストリア文学研究のひとつの新しい方向性となろう。今やあまりにも一般化してしまった「ハプスブルク神話[6]」とは別の、より「オーストリア的」なオーストリア文学のメルクマールが、もしかしたらそういうところに見つかるかもしれない。

小論では、このような問題意識を出発点にして、私の手元にある一九九五年版の『シュタイアーマルクの農民暦[7]』を読み解き、そこに現れたオーストリアのカトリックの民俗的要素を私なりに理解しようという試みである。この試みはもちろん、この土壌・風土のうえに花開くであろうオーストリア文学を、これまでとは違う角度から捉えなおしてみようという、私の研究姿勢のささやかな変化を示すものである。

二　オーストリアの国の祝祭日

『シュタイアーマルクの農民暦』を読む前に、現在のオーストリアの国の祝祭日を一瞥しておこう。カトリックの国オーストリアでは、国の祝祭日はほぼカトリックのそれと一致しているが、ちなみに一九九九年の国の祝祭日は以下のようになっている。なお、復活祭のような移動祝日は年によって異なっているので、かっこに入れて示すことにする。

一月一日　新年 Neujahr
一月六日　三聖王の祝日 Heilige Drei Könige
（四月四日）　復活祭の日曜日 Ostersonntag
（四月五日）　復活祭の月曜日 Ostermontag
五月一日　国家の祝日 Staatsfeiertag
（五月十三日）　キリスト昇天祭 Christi Himmelfahrt
（五月二十三日）　聖霊降臨祭の日曜日 Pfingstsonntag
（五月二十四日）　聖霊降臨祭の月曜日 Pfingstmontag
（六月三日）　聖体の祝日 Fronleichnam

八月十五日　マリア被昇天の祝日 Mariä Himmelfahrt
十月二十六日　国民の祝日 Nationalfeiertag
十一月一日　万聖節 Allerheiligen
十二月八日　マリア無原罪受胎の祝日 Mariä Empfängnis
十二月二十五日　クリスマス Christtag
十二月二十六日　シュテファンの祝日 Stephanitag

これらの祝祭日のうち、カトリックに無関係なのは、五月一日の「国家の祝日」と十月二十六日の「国民の祝日」くらいであるが、五月一日、すなわち労働者の祭りとされているメーデーが、その起源を樹木を信仰の対象とするケルトの春の祭りに遡ることができるということは、今さら私が指摘するまでもないことだろう。[8] キリスト教がヨーロッパ世界に浸透していく過程で、ケルトやゲルマンといった異教の信仰を一方では徹底的に破壊しながら、他方では巧みにキリストやマリアや諸聖人の伝説に取り込み、一元化を押し進めていったことを考えると、五月一日もまた、キリスト教との関係性に絡め取られることになる。その意味で、キリスト教とまったく無関係なのは、十月二十六日の「国民の祝日」だけである。

「国民の祝日」とはそもそも、オーストリアが帝国であった時代には、皇帝フランツ＝ヨーゼフ一世の誕生日を祝うための日であり、現在の十月二十六日ではなく、皇帝の誕生日の八月十八日であった。帝国内には多くの（公式には十一の）民族 Volk が混在していたが、これら諸民族が共通して帝国の象徴である皇帝

の誕生日を祝う日に、「皇帝の誕生日」でもStaatsfeiertagでもなく、Nationalfeiertagという名称を与えたことの意味は、容易に察しがつく。オーストリア＝ハンガリーは多民族国家Vielvölkerstaatであるが、帝国の臣民としては、Volkの違いを超えて一つのNationであるという、ある種の国家幻想を演出しようという意志が読みとれるのである。帝国が崩壊した後、誰にも望まれずして誕生した第一共和国では、もちろんこの「皇帝の誕生日」はなくなり、共和国宣言の日である十一月十二日が「国家の祝日」Staatsfeiertagとなった。Nationalfeiertagは、多民族国家である帝国の崩壊とともに消滅したのである。その後、一九三八年にこの第一共和国は、いわゆるドイツ第三帝国に併合されて消滅するが、そのときにまた、この「共和国宣言の日」も運命をともにする。それに代わって、五月一日が「ドイツ民族の国民の祝日」Nationaler Feiertag des Deutschen Volkesとなり、形のうえではNationalfeiertagが復活することになる。十月二十六日が祝われるようになるのは、第二共和国の時代になってからのことで、それは一九五五年十月二十六日である。第二次世界大戦が終結して十年以上の年月が経過してようやく、オーストリアは占領状態から自立の道を歩き始める。その日が現在の「国民の祝日」ということになるが、当時はまだ「オーストリアの旗の日」Tag der österreichischen Fahneと呼ばれていて、しかもこの日を休日にしていたのは学校だけであった。それから十年後の一九六五年十月二十六日、連邦基本法によりオーストリアの中立を維持する意志が表明され、それとともにこの日が「国民の祝日」と定められたが、休日になったのはそれからさらに二年後の一九六七年であった。[9] オーストリアの「国民の祝日」の変遷をこのようにざっと眺めてみると、十九世紀後半から現在にかけてのオーストリアの激動の歴史を垣間見ることができる。

暦の最初の日は一月一日であり、この日を祭日とするのは、なにもキリスト教に限ったことではなく、わが国でも当然のことながら祭日、しかも、一年のうちでもっとも重要な祭日である。時間というものは切れ目なく続いているものだが、地球が太陽を公転する時間の長さは、特別の意味をもっている。それが一年という時間の単位であり、ある時点を起点として経過する一年という時間ののち、地球は太陽に対してまた同じ位置に戻ってくる。地球の自転に基づく一日という時間の単位と、公転に基づくこの一年という時間の単位、つまりこの大小ふたつの円周が暦を形成するのだが、では、どこにこれらの円周の始点を定めればよいのか。現在の暦では、一月一日がこの始点ということになる。

季節によってその時刻は変化するが、一日には、日の出と日の入りという明らかな目印がある。ユダヤ教では、今でも日没を一日の始まりとするそうだが、そうすると、季節によって一日の始まりの時刻が違ってくるし、一日を何等分かして得られる時間の長さも、季節によって伸び縮みすることになる。しかしそれでも、一日という円周の終わりと始まりとを経験的に確定するという点では、真夜中の十二時よりもある種の合理性がある。

それに対して一年は、日の出、日の入りというような、誰にでも簡単にわかる目印がない。もちろん、南中時の太陽の高度をもとに、高度がもっとも低いときを一年の始めとする、ということが考えられるし、実際、「クリスマスがこれまではまた新年であり、それ故に新しい火を獲得するときでもあった」[10]とすれば、このほうが理屈に合う。理屈には合うが、日没とは違って、太陽の高度を正確に測定するには、かなり高度な技術が必要であり、中世史の専門家が「国ごとにときには町ごとに暦が違っていましたし、年の始まりす

ら違っていたのです」[11]と言うように、いまだ天動説を教義としていた中世ヨーロッパの、ラテン語も文字の読み書きもできない民衆においては、一年の始めの日を特定することなど、経験的に可能な範囲を超えている。現在の新年は「一六九一年に法王イノケンティウス十二世によってはじめて新年と決められた。それ以前は新年は一定の日に定められているわけではなかった」[12]し、そのうえ「アルプスのプロテスタント地域ではいくつかの祭りは、古いユリウス暦に基づいて行われているが、この暦は一五八二年以来採用されているグレゴリオ暦より十三日あとになる」[13]という事情を考慮すると、われわれが常日頃何気なく用いているカレンダーの、別の顔が見えてくる。

この問題について論じることが小論の主題ではないので、現在われわれの用いているカレンダーの一月一日が「新年」となったのは、太陰暦を用いていたわが国ではもちろん、ヨーロッパでもそれほど古いことではないという指摘にとどめておこう。冬至が過ぎた後、新年が始まり、三聖王の日が過ぎると、太陽の高度は高くなっているにもかかわらず、寒さはますます厳しくなり、冬はいよいよ本格的になる。オーストリアでは、カーニヴァルをファッシング Fasching と呼んでいるが、それは一年でもっとも寒いこの時期に行われる、一種の仮装行列である。ファッシングが過ぎると、復活祭まで精進潔斎の期間があるが、陽射しが日毎に確実に強くなっていることが、肌で感じられる。復活祭と、その前後の復活祭休暇までは、あと一息というところである。

春分の日の後の最初の満月に続く日曜日が復活祭で、ここに満月が介入するところを見ると、なにやら異教の匂いがしてくる。この日がキリストの復活に結びつけられたのは、三二五年のニケアの公会議において

であり、「教会はこれによって、春の火と今日なお保持されているその他の風習で祝われている太古の異教の春の祭りを占領した」[14]と言われているように、後述するマリア関係の祝日に比べると、はるかに古いものである。もっとも、実在のイエスが刑死したエルサレムよりはるかに北にあるオーストリアでは、復活祭が過ぎても、まだ本当に春が来たなどとは思えない日もある。復活祭の後でも、吹雪くことがあるのだから。

五月一日になると、さすがに春もたけなわで、その後にキリスト昇天祭、聖霊降臨祭、聖体の祝日と、キリストに関係する祝日が続いて、夏を迎える準備ができる。キリスト昇天祭が復活祭との関係で移動祝日であるのに対して、マリア被昇天の祝日は、八月十五日に固定されている。マリア関係の祝日は、一月一日の「神の母聖マリアの祝日」から始まり、二月二日の「聖母清めの祝日」、三月二五日の「受胎告知の祝日」、五月三一日の「聖母訪問の祝日」、八月二二日の「女王マリアの祝日」、九月八日の「聖処女の誕生の祝日」、一一月二一日の「聖処女の奉献祭」、一二月八日の「無原罪受胎の祝日」など、一年中にわたっている[15]が、これらのうち、八月十五日と十二月八日がオーストリアの国の祝祭日として採用されている。マリア信仰に関しては、「マリア学」なる学問が存在しているくらいだから、ここで軽々しく述べることはできないが、マリアツェルをはじめ、オーストリアにはたくさんのマリアの巡礼教会が存在しており、マリア信仰はオーストリアのカトリックから切り離すことができない。ところが、新約聖書の正典でマリアについての言及がきわめて少ないことからもわかるように、異教の大地母神の匂いがするマリア信仰は、長い年月をかけてカトリックの教義に取り入れられてきたものである。オーストリアの国の祝祭日になっている「マリア被昇天」の教義がローマ法王ピウス十二世によって宣言されたのは、なんと一九五〇年一一月一日のことであり、

これは「カトリックの五〇年ごとの大聖年にあたって発表されたもの」[16]である。

マリアの巡礼教会では、マリア自身が神であるかのような栄光に包まれている聖母子像に出会う。[17] マリアはまさに、天の女王としての地位を、マリア被昇天の教義によって認められたのである。わが国では「お盆」にあたるマリア被昇天の祝日は、真夏の太陽がどことなく穏やかになり、忍び寄る秋の気配が感じられる日でもある。そして、マリアの誕生日である九月八日頃には、北国オーストリアではもうすっかり秋になっている。収穫の月である十月が過ぎ、十一月になると、もう晩秋を過ぎて初冬になっている。レオポルト・シュミットによると、晩秋から早春にかけての季節には、蠟燭の灯りを伴う民俗行事が特徴的だということだが、[18] 十一月一日の万聖節と翌二日の万霊節には、ちょうど日本のお彼岸のように、墓参りをし、墓に花輪と蠟燭を捧げる光景に出会う。

カトリックの聖人にはそれぞれ聖人の日が割り当てられていて、その日にはその聖人を祝うことになるのだが、なにしろ聖人の数はすでに相当な数に上り、そのうえごくわずかとはいえ、いまだに増え続けており、一年三百六十五日ではとうてい間に合わない。そのうえ、復活祭などの移動祝日が重なると、そちらのほうが優先されるので、その日の聖人は祝われないことがある。また、聖人には、時代や地方や職業集団などで、人気不人気はもちろん、はやりすたりもあり、ほとんど誰も知らないような聖人が多数存在するし、同じ日に何人かの聖人の祝日が重なることもある。[19] このように、年に一度も祝われることのない数多の聖人たちを、この日にまとめて祝ってしまおうというのが万聖節の公式の趣旨だが、もともとこの日は収穫祭であると同時に、先祖供養の行事に起源があるようだ。[20]

万聖節と万霊節という、まるで双生児のようなこの二日間は、その年の収穫に感謝する日であるとともに、先祖供養の日でもあるのだが、「八七五年にグレゴリウス四世が、祝日を、食物の豊富な秋の収穫の終わった十一月一日に変更し[21]」、「十世紀になって、クリュニー修道院長オディロンが、翌日の十一月二日をキリストのもとに眠るすべての死者の日にして死者の魂のために祈ることを提唱し[22]」て、現在の形になったようだ。収穫をし終えて、その意味では生命を刈り尽くした畑に、次の年に再び生命が戻ってきてもらわなくてはならない。そうだとすれば、収穫物を祖先に捧げ、新しい生命の到来を祈るのは、人間の行為として自然なことであろう。この収穫祭＝祖先供養の儀式を、キリスト教は諸聖人に取って代わらせようとするのだが、冬至や夏至の祭りほどには、キリスト教化がうまくいかなかったようだ。万聖節の翌日を、すべての死者たちの日として残さねばならなかったのだから。

また、祭日にはなっていないが、十一月十一日は聖マルティン（マルティヌス）の日で、オーストリアではこの日にガチョウを食べる習慣があり、このガチョウはMartiniganslと呼ばれている。自分のマントの半分を寒さに凍えている物乞いに与えたという伝説[23]をもつこの聖人とガチョウを食べる習慣とがどう関係しているのか、なかなか合理的な説明に出会わないのだが、鶏肉に比べて三倍近い高カロリーのガチョウの肉は、収穫を終えて冬支度に入った人々にとって、寒い冬に耐え、来るべき労働の年に備える貴重なエネルギー源であったに違いない。なお、この日の早朝、入学したばかりの小さな子供たちがミサに集まり、めいめいの手作りの円筒形の提灯を下げて、教会から学校の中庭まで提灯行列をする。この灯りが、人々を正しい方向に導くということになっている。

そうしているうちに一年の最後の月である十二月がやってくる。待降節Adventの四回の日曜日には、あらかじめ教会で聖別してもらっておいたAdventkranzの四本の蠟燭に一本ずつ灯をともしていく。その間に、十二月六日の聖ニコラウスの日があり、十二月八日の「マリア受胎の祝日」がある。オーストリアでは、赤い服を着てトナカイの橇に乗ったサンタクロースではなく、ニコロという愛称で呼ばれる聖ニコラウスが、真っ白な出で立ちをして、全身真っ赤なクランプスという鬼を連れてやってくる。それもクリスマスイヴではなく、十二月六日である。この民俗行事の起源は、「冬至の頃の長い夜には、デーモンや死者の霊が自由に徘徊することになっているという信仰」[24]に基づいており、この夜ニコロは、聖人というよりは悪霊として冬の野山を駆け回ったようである。現在のウィーンでは、悪はすべて赤鬼のクランプスが受け持つように書き換えられているけれども。

マリア無原罪の受胎は、「一八五四年二月八日にピウス九世が宣言した『無原罪受胎』の教義で、マリアが原罪なくしてその母アンナの胎に宿ったとするものである。これは本来、『神の母』が普通の人間であってはおかしいという、初期教父による神学的思弁から生まれた抽象的なものであった」[25]ということで、マリア被昇天に次いで新しい教義である。ちなみに、マリアに関する教義のうちもっとも古い第一の教義は、「四三一年、小アジアのエフェソス公会議で、マリアを『神の母＝テオトコス（Theotokos）』としたもの」[26]で、「第二の教義は、六四九年、ラテラノの公会議で正式に決められた。『マリアの処女性』に関するものである。マリアは『いつも』処女であった。すなわち、受胎の時も、イエス出産の時も、また出産後も処女であったとされる」[27]。これら二つの教義に比べると、無原罪受胎と被昇天、すなわち第三と第四の教義は、驚

くほど新しいことがわかる。すでに述べたように、マリア信仰は、明らかに民間レベルでの信仰が先行し、ローマ法王庁はそれをずいぶん後になってから追認しているのである。もちろん、民間信仰のレベルではそれほど整備された教義が最初から存在しているはずはなく、異端すれすれどころか、異端そのもの、あるいは、マリアのなかに大地母神を見るような異教への揺り戻しさえ感じられる。カトリックがマリア信仰に対して慎重な態度をとったとしても不思議はないし、「聖書に帰れ」と叫んだルター派は、そもそもこのマリア信仰を廃してしまった。一神教であるはずのキリスト教に、マリアや諸聖人など不要である、と言えるのかもしれないが、最近のドイツにおけるキリスト教離れの傾向をみると、ルター派に比べてカトリックのほうがまだましであるという事実[28]のなかに、マリア信仰を追認し正統の教義に取り入れていったカトリックの姿勢の果たした役割を読みとることができる。カトリックの年中行事が、一年の推移とそれに基づく民衆の季節感により忠実であったことと、それは無関係ではない。

クリスマスと最初の殉教者聖シュテファンの日が過ぎ、聖シルヴェスターの夜が過ぎると、再び新年になる。オーストリアでは、国の祝祭日を一巡するだけで、すでにカトリックのおもな年中行事を経験する仕組みになっている。ウィーンという、オーストリアでは唯一の大都市でも、カトリックの年中行事の名残を垣間見ることができる。カトリックは、その教義においてはきわめて緻密で膨大な体系を形成してきたが、ギリシャ語ともラテン語とも「標準ドイツ語」とさえ無縁だったであろう地方の農民たちは、地方ごとのヴァリエーションをもちつつ、カトリックによって裏付けられた民間信仰の世界空間にあって、毎年同じように繰り返される四季の移り行きを生きてきたはずである。

しかも、この季節の移り行きは、ただ漠然とした季節感のようなものではすまされない。農業も牧畜も、狩猟でさえ、季節の移り行きと密接に関係している。時期を間違えると、取り返しのつかないことになる。そのために必要な情報を与えてくれるもの、それが暦なのである。暦を読み解くということは、その暦を用いている文化を読み解くということである。

三　農民暦のことわざ

シュタイアーマルク州の州都はオーストリア第二の都市グラーツだが、ウィーンと比べてはるかに小さな都市で、とうてい大都市とはいえず、州全体が「田舎」という感じである。郵便局長の娘と結婚するために皇位継承権を放棄したヨーハン大公は、「シュタイアーマルクの宰相」とも呼ばれ、この州の発展に寄与した。ニーダーエスタライヒ州の南に位置するこの州にはまた、中欧最大のマリアの巡礼教会マリアツェルもある。「オーストリア的風土」という言葉を用いるとすれば、ドナウ川が貫流する上下エスタライヒ州よりも、ドナウ川の支流であるムーア川の流れるこの州のほうが、より適切であるように思われる。先述した郷土作家ペーター・ローセガーはまた、このシュタイアーマルクの作家である。

わが国で用いられてきた暦は古代中国の天文学に基づき、その後さまざまな修正が加えられてきたようだ[29]が、ヨーロッパでは、「カレンダーという語は古代ローマからきており、カレンダーという表現は月のはじめを表していた[30]」。中世ヨーロッパでは、文字の読めない農民を対象に、紙に印刷されたものではなく細い

棒に刻み目を入れたStabkalenderなるものが「中世の終わりまで用いられていて、当然のことながら、キリスト教の祭日がこのカレンダーには明示されていた[31]」という。このカレンダーは文字通り、時を刻むものであった。

その後、この暦は棒から板になり、さらに、一四四五年のグーテンベルクの印刷術の発明によって、暦はいちだんと体裁を整えられた。『シュタイアーマルクの農民暦』はそれらの暦のうちでも、比較的古いものであり、その古い体裁を保ちつつ、今日なお発行され続けている。私の手元にあるのは一九九五年版もので、以下、これを考察の対象とする。

現在では、かなり正確な天気予報があり、一年の推移を地球レベルで知ることができるが、ラジオもテレビも、もちろんインターネットもない時代、しかも、農業を暮らしの重要な基盤としていた時代には、季節の推移をおろそかに扱うことができない。ある日の朝がぽかぽかと暖かい良い天気だからといって、その陽気がずっと続くとは限らない。これでもう春が来たなどとぬか喜びをして種まきなどしたら、その直後にまた寒さが戻ってきて、せっかくまいた種をすっかりだめにしてしまうかもしれない。収穫率が低かった時代にあっては、もしもそんなことにでもなったら、たちまち飢饉となって飢え死にしてしまう。農民が経験的に熟知しているはずの、そして、熟知している必要のある知恵と知識とが、この農民暦には豊富に書き込まれている。

たとえば、一月の頁の最初には、次のようなことわざが書いてある。

Wenn der Frost nicht kommen will,　霜が来ようとしないなら、
kommt er sicher im April.　きっと四月に来るだろう。

一月が暖かいからといって油断はできないことが、このように覚えやすい韻を踏んだ詩の形にまとめられている。これらのことわざは、「農民の規則」Bauernregeln と呼ばれている。

Kommt der Frost im Jänner nicht,　一月に霜が来ないなら、
zeigt er im März sein Gesicht.　三月に顔を見せる。

これも同じことを表している。霜の降りないような暖かい一月は、三月四月になってからが大変だというのである。その反対に、一月が寒いと、これから始まる一年の天候の穏やかさが予告される。

So hoch der Schnee, so hoch das Gras.　雪の高さは草の高さ。

Je frostiger der Jänner,　一月が寒ければ寒いほど、
je freundlicher das ganze Jahr.　一年中が穏やかになる。

二月になると、太陽の高度も一月に比べてずいぶん高くなり、陽射しも強くなっていることがわかるのだが、寒さは一年中でもっとも厳しい。ファッシングがあるのも、あちこちで舞踏会が催されるのも、この頃である。二月のことわざには、こんなものがある。

Singt die Amsel im Februar, bekommen wir ein teures Jahr.

ツグミが二月に鳴いたなら、とんでもない年になる。

Friert es nicht im Hornung ein, wird's ein schlechtes Kornjahr sein.

二月に凍りつかないなら、ひどい作柄になる。

二月は寒いことに決まっているのだから、時ならぬツグミが鳴いたり、霜が降りなかったりすると、たいへんな年になる、というわけである。しかし、もう少し辛抱すれば、復活祭は間近である。日本よりもはるかに北にあるオーストリアでは、冬の夜の長さはたいへんなものだが、これが北ドイツや北欧になると、さらにオーストリアの比ではないだろう。長い冬の夜に物語の糸が紡がれるのも納得がいくが、そのかわり、三月ともなると、日照時間の長くなるのが顕著である。一日一日、着実に昼の時間が長くなっているのがわかる。

Läßt der März sich trocken an,　三月が乾燥していれば、
bringt er Brot für jedermann.　誰にもパンを持ってくる。

Wenn im März viel Winde weh'n,　三月に風がたくさん吹いたなら、
wird's im Mai dann warm und schön.　五月は晴れて暖かい。

三月に雨が少なければ、小麦の収穫量が期待できるし、風がたくさん吹けば、五月は晴れて暖かいというのは、三月がまだ気候のうえでは厳しいということを意味している。三月の陽射しは、空気が乾燥しているせいもあるのだろうが、わが国の三月に比べると、はるかに強く感じられる。それなのに、風はまだ身を切るように冷たく、ときには吹雪になることもある。陽射しの強さを差し引けば、まだまだ真冬と言ったほうがあたっているようにさえ感じられる日が多い。

復活祭は、早い年なら三月の末、遅くとも四月の初旬である。この頃は、春とはいっても、天気はまだ不安定で、変化が激しい。

Aprilwetter und Kartenglück　四月の天気とカードのツキは
wechseln jeden Augenblick.　瞬く間に変化する。

まさに言い得て妙である。そして、天候の変わりやすい四月に降る雨は、恵みの雨でもあることが、次のことわざからわかる。

Ist der April trocken, muß das Wachstum flocken.

四月が乾いていたならば、草木の育ちは悪くなる。

Nasser April verspricht viel. 湿った四月は期待が大きい。

Donner im April viel verkünden will. 四月の雷雨は多くを予告する。

五月ともなると、北国のオーストリアでも、さすがに雪や霜の心配はなくなり、五月柱を立て、完全に春になったことを祝うのである。聖霊降臨祭、聖体の祝日と続くこれらの祝日に、農耕社会の儀礼が重なって見えてくるのはごく自然なことである。

オーストリアにはもちろん、梅雨はない。したがって六月は、燦々と強い日の光が地上に降り注ぐ月である。とくに、キリスト昇天祭以後はそれが顕著である。キリスト教の、したがってユダヤ教の神は、世界の創造以前に存在しており、『創世記』にあるように、光と闇とを分けたのだから、多神教で最高神とされることのある太陽神ではない。その唯一神の子であり、かつまたその神自身でもあるイエス・キリストも、太

陽神ではない。しかしながら、この世のすべての生命が太陽のエネルギーにその源をもっているのだから、キリストと太陽とが、少なくとも民間信仰のレベルでは、深い関わりを持つのは当然である。早い話が、クリスマスは冬至の祭りであり、この日を境にして太陽が少しずつ活力を回復し、日照時間が徐々に長くなる。キリストの復活を祝う復活祭が、春分の日そのものではなく、春分の後の満月という、やや手の込んだ設定になっているのは、「暑さ寒さも彼岸まで」とはいかない北国の気象条件もさることながら、もうひとつの暦である月の影響力が見えてくるが、誕生と復活というイエス・キリストの生涯の重要なモメントと太陽の運行とは、明らかに重なっている。一神教であるキリスト教には、太陽神も月の女神も存在しないのだが、それはあくまでも教義のうえのことで、あらゆる生命の根源である太陽とキリストとの深い関係は、否定できない。キリスト昇天祭は、春分でも夏至でもないが、その中間にあって、太陽がにわかに輝きを増すように、地上では感じられる時である。ちなみに、夏至は、イエスの「いとこ」であり、イエスに洗礼を授けた洗礼者ヨハネの祝日になっている。

Was im September soll geraten,　九月にうまく出来上がるはずのものは、
soll bereits im Juni braten.　六月にすでに焼き始められていなくてはならない。

Juni trocken mehr als naß,　六月が湿っているより乾いていたら、
füllt mit gutem Wein das Faß.　樽を良いワインで満たしてくれる。

このように、六月は、ぎらぎらと照りつける太陽の月であり、それがまた、秋の豊かな実りを約束しているのである。聖体の祝日のミサの言葉を聞いていてふと気づくことは、聖体とはキリストの肉体、つまりパンとワインのことであり、小麦とブドウの実りを祈願しているということである。一九九九年の聖体の祝日は六月三日だが、六月の天気が秋の収穫に大きく作用しているからこそ、聖体の祝日の行列は、復活祭のそれにもまして華美なものとなるのである。私がウィーンに滞在した一九九七年は、四月が寒くて吹雪く日もあったが、キリスト昇天祭以降、太陽が地上を照りつけ、聖体の日の行列に参加したときには、目も眩むような眩さだった。その結果、この年のワインは上出来で、手に入れるのが困難になってしまうほどであった。

七月はそれに対して、また天候不安定な月である。あまりに天気が良すぎると、日照りのためかえって農作物に被害が出ることがある。適度な雨が必要なのである。もちろん、強い日照りも欠かせないが。

Wie der Juli,　　七月の様子が
so der nächste Jänner.　来年の一月だ。

Wer im Juli sich regen tut,　七月に雨を受けるなら、
sorget für den Winter gut.　冬の備えは万全だ。

Wettert der Juli mit argem Zorn,　七月がひどい天気になったなら、

bringt er dafür recht viel Korn.　かわりに豊作を持ってくる。

Was der Juli nicht siedet,　七月が茹でないものを
kann der August nicht braten.　八月は焼けない。

日本よりはるかに北にあるとはいえ、オーストリアの七月は、やはり猛暑の日が多い。窓の外にはたいてい寒暖計がつり下げられているが、直射日光の下では、四十度を超すこともめずらしくない。それでいて、夕立や雷雨はもちろん、雹が降ることもある。そのすまじさは、経験してみないとわからない。しかしそれも、八月になると、微妙に変化してくる。

Wenn's im August stark tauen tut,　八月に露がひどく降りるなら、
bleibt das Wetter meistens gut.　天気はたいていずっと良い。

八月の露が、いよいよこれから始まろうとする秋の天気を予告している。露が落ちるということは、昼と夜との寒暖の差が大きくなるということで、晴れた昼間は真夏の暑さだが、朝夕の涼しさは、秋を感じさせる。このように、季節が順調に移って行くならば、秋の天気はたいてい良い、というのが農民暦の知恵である。

それに対して、九月に天気がぐずつくと、ろくなことにはならない。

Nach Septembergewittern　九月に嵐が来るならば
wird man im Februar　二月になると
vor Schnee und Kälte zittern.　雪と寒さで身が震う。

Septemberwetter warm und klar,　九月の天気が晴れて暖かいなら、
verheißt ein gutes nächstes Jahr.　来年が良い年になる徴だ。

Septemberregen wirkt wie Gift,　九月の雨は毒になる、
wenn er die reifen Trauben trifft.　実ったブドウに当たるなら。

九月の天気が晴れて暖かならば、翌年もいい年になるが、九月に雨が多いと、それはちょうど毒の雨で、熟し始めたブドウに悪い影響をもたらす。せっかく夏の暑さが通り過ぎても、それでは最後の仕上げで躓くことになる。

十月は収穫の月だが、冬はもう間近に迫っている。私自身が最初にウィーンで暮らした年の十月は、毎日晴れて暖かく、これなら日本の秋晴れとあまり変わりがないと感じたが、それはもちろん年による。年に

よっては、真夏でもコートが必要になることもあるほどである。

Ein Oktoberhimmel voll Stern,　十月に満天の星ならば、
hat warme Ofen gern.　暖かいストーブがほしくなる。

Hält der Oktober das Laub lange fest,　十月が木の葉をずっと落とさないなら、
so sorge für ein warmes Nest.　暖かいねぐらを用意しなさい。

このように、十月が暖かくて良い天気の年には、厳しい冬がやってくることを、このことわざは教えているが、それは、私自身の体験と同じである。

Wenn Frost und Schnee im Oktober war,　十月に霜と雪とが降りたなら、
so folgt ein linder Januar.　穏やかな一月がやってくる。

Gewitter im Oktober künden,　十月の嵐があなたに告げるのは、
daß du wirst nassen Winter finden.　湿った冬になることだ。

Schneit's im Oktober gleich,　十月そうそう雪降れば、
wird der Winter weich.　冬は穏やかになる。

十月について、このような対をなすことわざが同じページに書かれているのは、すでに一月や二月で見たのと同じである。オーストリアの天気は、それほど年によって違いがあるのだが、この天気の影響をもろに受ける農民にとって、おろそかにすることはできない。生産力が低かった時代には、それこそ死活問題だったことだろう。十一月は、いよいよもう、冬の始まりである。すでに述べたように、この時までに収穫を終え、祖先を供養して、来年の豊作を祈願しなくてはならない。もちろん、冬の備えを万全にしておかなくてはならない。

Wer sein Holz um Weihnachten fällt,　薪をクリスマスの頃に伐る者は、
dem sein Gebäude zehnfach hält.　家が十倍も長持ちする。

Dezember kalt mit Schnee,　十二月に雪が降って寒ければ、
tut dem Ungeziefer weh.　害虫も苦しかろう。

十二月は、『農民暦』にはキリスト月 Christmonat とある。救世主の誕生を待つという意味がこめられて

いるが、意外に暖かい日もある。そのために、寒い日が来ると、つい閉口してしまうが、雪が降って寒いと害虫にとってもその寒さが厳しいのだから、むしろ十二月の寒さは歓迎すべきだと、ことわざは教えている。

概して気候が厳しく、年によって違いの大きいオーストリアでは、一年をどのように生きるかという指針を、これらの農民暦のことわざが教えようとしている。私の手元にある暦の巻末には、一七七一年のことわざが付録として載せられている。現在のものと比べると、それらはただ季節の推移を示唆するにとどまらず、その月に行うべき農作業について具体的な指示を与えている。聖書とともに、農民暦は、ある時代には、それこそ「一家に一冊」という具合に、ひろく普及していたと考えられる。農民暦には、その年を生き抜くための具体的な情報が書き込まれているからである。

四　農民暦と天気占い

農民暦にはこのように、一年の季節の推移を正しく捉えるという重要な役割があるが、もともとは、その日その日を、この一年の季節の推移のなかに正しく位置づけ、どのように暮らしたらいいかという指針を与えるべきものである。一神教であるキリスト教の宗派のひとつであるカトリックが生み出した聖人のシステムは、農民暦のこの機能と実にうまく合致している。

カトリックの信者たちは、洗礼のときにこれらの聖人のなかからその名前を与えられる。誕生日とは別に、その聖人の祝日がNamenstagとなる。また、村落共同体には必ず教区教会があるが、それらはまた、ザン

クト・ペーターとかザンクト・ファイトとか、その教会がまつる聖人の名前が付いていることが多い。あるいは村全体が聖人の名前を付けられていることもある。ウィーンのような大都市になると、市内にいくつもの教会が存在しているが、シュテッフェル Steffl の愛称をもつザンクト・シュテファン大聖堂が中心であり、その聖人が都市の守護聖人にもなっている。ギルドとかツンフトという名前で知られているさまざまな職業集団にも、それぞれの守護聖人がいる。ペストをはじめさまざまな病気に効く聖人もいる。ある個人が、その社会的諸関係によって、一年に何回か、特別の聖人の日を祝うことになる。

もともと人間は神の前に平等であるはずだから、聖人という特別の存在があることも考えようによってはおかしいし、神に選ばれたこれらの聖人に序列があるのも不思議なことだが、病気の奇蹟的治癒や商売繁盛のようないわゆる現世利益を、神と人との間に立って行うのが聖人の機能だから、その奇跡の力の大小が民衆の間では問題になるだろう。聖人がたいていは、ある時代に生きて殉教した人間であり、同時にまた、現在でも継続的に再生産されているのだから、聖人崇拝には独特の地方性と時代による流行を生むことにもなる。

もちろん、聖人としてきわめて安定した地位を獲得している聖人も数多くいる。彼らは、イエスの弟子であったり、初期の殉教者であったりする。奇跡の力が広く世間に認められ、彼らをまつる教会もあちこちに存在する、いわば聖人の顔役のような存在である。聖人を配した暦のなかでは、このような大物聖人は大事な日に割り当てられていることが多い。

一月六日は、十二月二十五日に生まれたイエスのところに、東方から三人の王、あるいは三博士が、星に

導かれて祝福に訪れる日ということになっている。これら三人の王は、「メルキオールはヌビアの国王、三人のうちでは最も小柄で、救世主には黄金［王者の象徴］を献上したし、バルタザールはカルデアの王で、身丈は中背、香料を進上し、もう一人のカスパルはタルシンの王、長身、『肌黒のエチオピア人』で、没薬を献上した」[32]とされている。このように「東方の三博士」はそれぞれ、来歴も身分も背格好も役割もはっきりと定められている。この日、イエスの生まれた馬小屋に、羊飼いや動物に混じって、これら三人の王が訪れる様子を描いた模型は、クリッペ Krippe と呼ばれている。

Ist bis Dreikönig kein Winter,　三聖王の日まで冬がなければ、
folgt keiner mehr dahinter.　それ以後に冬が来ることはない。

セバスティアンの殉教は、美しい若者の裸体に何本もの矢が刺さった図像で描かれる。これらの矢がこの若者に致命傷を与えたのではなくあとで撲殺されるのだが、セバスティアンにはいつも、撲殺よりははるかに甘美なイメージを与えるこの図像が与えられている。聖セバスティアンの日は聖ファビアンと同じ一月二十日で、この日から寒さがいよいよ厳しくなる。

Fabian und Sebastian　ファビアンとセバスティアンから
fängt der rechte Winter an.　本当の冬が始まる。

パウロは、「パウロの回心」という劇的な出来事によって、キリスト教のもっとも精力的な伝道者になった人物である。クリスマスからちょうど一か月目の一月二十五日は「パウロ回心の日」となっているが、この日は、その日の天気次第で、その後の一年の天気が占われる重要な日となっている。

Ist Pauli Bekehrung hell und klar,　パウロ回心の日が爽やかに晴れるなら、
so hofft man auf ein gutes Jahr,　よい年が期待できるが、
hat er Wind, so regnet's geschwind.　風が吹けば、ただちに雨になる。

二月二日は「マリアのお清めの日」ということになっているが、それは、「イスラエル人の宗教儀式の掟によれば、男子が生まれた場合、母親は三十三日間潔斎の期間を過ごさなければならないように定められている。〔その女はなお、血の清めに三十三日を経なければならない。その清めの日の満ちるまでは、聖なる物に触れてはならない〕（レビ記一二、四）[33]」ということからきている。この日の習俗として知られているのは「かごいっぱいを蠟燭の聖別することで、これは、死者や冬のデーモンを松明や蠟燭で追い払おうとした異教の祭りの名残[34]」であり、それはつまり、ちょうどわが国の節分に対応している。まさに、「暦のうえでは春」というのがこの日である。

Wenn's um Lichtmeß stürmt und schneit, ist der Frühling nicht mehr weit.

Ist es aber klar und hell, kommt der Frühling nicht so schnell.
お清めの日頃に吹雪くなら、春はもう遠くないが、
その日が爽やかに晴れならば、春の訪れは遅くなる。

養父ヨセフは、三月十九日が祝日である。わが国でいえば、「彼岸の入り」ということになろう。この日もやはり、これからの一年を占う重要な日になっている。

Ist's am Josefstag hell und klar,　ヨセフの日が爽やかに晴れるなら、
so folgt ein fruchtbares Jahr.　実り豊かな年になる。

受胎告知は、三月二十五日となっているが、これは春分の日にあたり、ここから春が始まる。もちろん、十二月二十五日のクリスマスのちょうど九か月前である。

Zu Mariä Verkündigung　マリアの受胎告知のために
kommen die Schwalben wiederum.　ツバメが再びやってくる。

聖ゲオルクは、もっとも人気の高い聖人の一人で、竜を退治する馬上の騎士の図像で表される。やはり竜

を退治する大天使ミカエルとともに、この二人の聖人の名前（ミカエルは天使だから「人」ではないが）は、騎士の叙任式の際に唱えられる。移動祝日の復活祭は、遅くとも、四月二十三日の聖ゲオルクの日までには過ぎている。このときまでに草がどの程度生い茂っているかによって、やはり一年の善し悪しを占う。

Wenn sich zu St. Georg ein Rabe im Korn verstecken kann,
deutet es ein gutes Jahr an.

聖ゲオルクの日にカラスが麦畑に隠れられるなら、
それは良い年の徴である。

すでに述べたように、六月二十四日の洗礼者ヨハネは、夏至に割り当てられたものである。七月のところで述べたように、七月の雨は大事だから、このヨハネの日と雨乞いとが重なり合っている。

Vor Johannes bet' um Regen,
nachher kommt er ungelegen.

ヨハネの前で雨を願えば、
そのあと必ず雨がやってくる。

六月二十九日はペテロとパウロの日である。ペテロは十二使徒のなかでも一番弟子と言うべき人物であり、その殉教の地がローマ・カトリックの総本山サン・ピエトロ大聖堂、ペテロ自身は初代ローマ法王ということになっている。伝道者パウロも、初期キリスト教において果たしたその功績は絶大であり、数ある聖人の

なかでも超大物であるこの二人が、同じ日を共有しているというのは、この日がそれほど大きな意味を持っているということだろうか。ペテロとパウロの日が、早くも翌年の天気を占っている。

Peter und Paul hell und klar,　ペテロとパウロが晴れるなら、
bringt ein gutes Jahr.　良い年がやってくる。

聖アンナは、聖母マリアの母である。マリアのことについての詳しいことは、聖書の正典には出てこないが、マリアが神格化される過程で、その母アンナもまた、ヨアキムという夫がありながら、マリアを無原罪受胎するという説話が付け加えられることになったようで、『ヤコブの原福音書』[35]で生き生きと語られている。この説話により、マリアもまたイエスと同じく、聖霊によって身ごもった神の子ということになる。神と人との間の取りなし役としてのマリアが神そのものになってしまうとすれば、その母のアンナが、その役割を娘から引き継ぐことになり、聖アンナ信仰は、オーストリアではマリア信仰に次いで盛んである。七月二十六日が聖アンナの日だが、この日が夏の暑さのピークということらしい。

Ist St. Anna erst vorbei,　聖アンナの日が過ぎてようやく、
kommt der Morgen kühl herbei.　朝が涼しくなってくる。

八月十五日のマリア被昇天の祝日は、神の血であるワインの出来栄えを占う日である。

Mariä Himmelfahrt im Sonnenschein,　マリア被昇天の日に陽が輝けば、
gibt es reichlich guten Wein.　たっぷりと良いワインができる。

マリアの誕生日は、九月八日とされているが、いよいよこの日が夏の終わりである。

Mariä Geburt　マリア生誕の日に
ziehen die Schwalben fort.　ツバメが去っていく。

天使の位階のうえでは、最下級から二番目の「大天使」Erzengel という低い位置に置かれている[36]聖ミカエルだが、多くの天使が堕天使となってしまったなかで、「聖人」の地位を獲得している。九月二十九日は聖ミカエルの日で、この日は同時にまた、他の二人の大天使ガブリエルとラファエルを祝う日でもある。人々にもっともなじみのある三人の大天使たちに捧げられたこの日の雨は、寒い冬を予告している。

Bringt St. Michael viel Regen,　聖ミカエルが雨をたくさんもたらせば、
wirst du im Winter Pelz anlegen.　冬に毛皮を着ることになる。

十一月一日の万聖節についてはすでに述べたが、この日はいわゆる小春日になる確率が高く、次のように言われている。

Bringt Allerheiligen den Winter,　万聖節が冬を連れてくるなら、
bringt Martini einen Sommer.　マルティンの日は夏を連れてくる。

十一月十一日のマルティンの日に夏のような暑さになることなどあり得ないのだから、万聖節が寒い冬の日になることなどめったにないということである。その聖マルティンの日が、晴れるか霧が出るかで、来るべき冬の天気占いが行われる。

Ist St. Martin klar und rein,　聖マルティンが爽やかに晴れるなら、
bricht der Winter bald herein.　まもなく冬がやってくる。
Wenn um Martini Nebel sind,　マルティンの日に霧が出れば、
wird der Winter meist gelind.　冬はたいてい穏やかだ。

十二月六日の聖ニコラウスの日にも、これからまだ続く冬の天気が予告される。

Regnet's an St. Nikolaus,　　聖ニコラウスの日に雨降れば、
wird der Winter streng und graus.　冬は暗くて厳しくなる。

聖夜である十二月二十四日は、アダムとイブに割り当てられている。

Wie's Wetter zu Adam und Eva war,　アダムとイヴの日のお天気は、
bleibt's wohl bis zum End' vom Jahr.　年の終わりまで続くもの。

クリスマスに雪が降ってこそいかにもクリスマスというところだが、天気占いでは、それは、来春の陽気を予告している。

Christkind im Schnee,　雪の中のクリスマス、
Ostern im Klee.　　クローバーの中の復活祭。

そしていよいよ大晦日。聖シルヴェスターの日である。ほとんど人通りのないクリスマスの夜と違って、この日は真夜中まで人出が絶えない。その熱気は、この夜の寒さを吹き飛ばしてしまうほどである。プンシュというシュナップス入りの紅茶で体を温めて、人々は夜空の下で新年を迎える。

Silvesternacht frostig und klar,　シルヴェスターの夜が寒くて晴れならば、
Glück auf zum neuen Jahr.　新年明けておめでとう。

農民暦から、おもな聖人とそこに記された天気占いを拾い出してみたが、一年の時の推移が、このようにして、一日一日、表情を変えながら途切れることなく続いているのである。農民暦には、このような天気占いのほか、黄道十二宮の星座や、月の満ち欠けが記入されている。驚くべきことに、その日の天気が記入されている日もあるのだ。天気の特異日というのが存在しているのだから、驚くには値しないのかもしれないが、それにしても、この一冊の暦は、ラジオも新聞もなかった時代には、一年を律する貴重な情報源であったに違いない。

五　むすびにかえて

私はこれまで、何本かの論文を書いてきたが、それらはすべて、いわゆる作品論であった。それは、日本でドイツ文学を学んだ人間としては、ごくふつうのドイツ文学研究の方法だろう。その私がここではじめて、作品論という、私にとっては安全地帯と思える領域を一歩踏み出した。

この論文、そもそもこれが論文と言えるのかどうか、作品論だけを書いてきた私のようなごく平均的な日本のドイツ文学者には、こういう論文の書き方というものを、修練してきた記憶がない。もっとも、門外漢

として、自分の専門以外の本も少なからず読んでいるのだが、カトリック、およびそれにまつわる民間信仰や習俗といった問題について、何を問題にすればいいのかという問題さえ、よくわからないというのが正直なところである。それに、そのような問題そのものを解明することが、私の仕事でもない。

ドイツとオーストリアとが、いったいいつ頃、またどのようにして別の国家意識をもつようになったのか、ということは、オーストリア文学を考えるうえできわめて重要な問題だが、古代ローマ帝国に目を向けてみると、今日のドイツはそのほとんどがローマ帝国の版図の外にあるのに対して、今日のオーストリアは、かなりの部分がローマ帝国の領域に含まれている。ハンガリーやスロヴェニア、クロアチアといった旧ハプスブルク帝国の領域に視野を広げてみても、やはりこの事情は変わらない。

この決定的な相違点が、ドイツとオーストリアの歴史、というよりドイツ語圏の各地方の歴史にどのような関わりをもつに至ったかという問題は、あまりにも難しくて、とうてい私などには答えることはできないが、ただ、ルターの宗教改革よりはるか以前に、ボヘミアでフスが出現し、ボヘミアでのカトリック離れが顕著になる。これはもちろん、「カトリック＝ハプスブルク家の支配」という構図があったからに違いないのだが、事態をただそれだけに還元してしまうことはできないだろう。フスから百年後にルターやカルヴァンが出て、カトリックの一元的支配の時代が終焉するが、ドイツ語圏の南北で、カトリックとルター派の勢力がほぼ二分されるのはなぜなのかという素朴な問いと考え合わせてみると、そこから、ドイツ語圏各地の気候や風土の相違を背景とする地方性があぶり出されてくるように思われる。

このことは、文学作品の研究にとってきわめて大切なのだが、インターネットが世界中に張り巡らされた

現在でも、実感を伴うことなしには知り得ない事柄である。実感という、はなはだ曖昧で、個人差や地域差が大きく、主観によってあまりにも限定されているものを基本にしなくてはならないとすれば、文献を基礎にして行われてきた外国文学研究が、それを最初からまったく顧慮の対象としなくても、しかたのないことである。しかしながら、作家を取り巻く環境と、作家自身およびその作品との相互関係にある程度の緊密なつながりがあるとすれば、それをひとつひとつ洗い出してみる必要はあろう。

私は今、シュミット＝デングラーによって「純粋にオーストリア的現象」として酷評された[37]アントン・ヴィルトガンス Anton Wildgans について、何かを語るべき使命感のようなものに突き動かされている。ウィーンの三区に下級官吏の長男として生まれ、幼くして母親を亡くした後、八区に転居し、そこにあるピアリステン小学校とギムナジウムに通った。娘の通っていた小学校がそれだ。ギムナジウムの入り口には、ヴィルトガンスのレリーフが埋め込まれている。これらの学校の母胎であるピアリステン教会の近くには、現在は民俗学博物館となっている旧シェーンボルン邸があり、その庭には「ヴィルトガンスの樫」が立っている。ヴィルトガンスはその少年時代を、世紀転換期のウィーンで過ごした。変わりゆくウィーンの生き証人として、晩年に『少年の日の歌』（一九二八）*Musik der Kindheit* を書いたが、もともとは詩人であり、劇作家であった。都市の子供として生まれながら、郷土作家のように、オーストリアの田舎を求めた。作品の多くは、シュタイアーマルク州との州境に近いニーダーエスタライヒ州のメーニヒキルヒェン Mönichkirchen のホテルで書かれ、永住の地としたのはウィーン近郊のメートリング Mödling であった。ここに家を買うに際して、その家の隣に聖オットマール教会が建っていたが、それは生まれた地区の教会と偶然に

も同じ名前だった。聖書劇三部作のうち、『カイン』（一九二〇）*Kain* は完成したが、『モーゼ』*Moses* は断片に終わり、『キリスト』*Christus* はその構想すら残さなかった。

ウィーンに生まれながら都市の作家になることを拒否したが、もちろん郷土作家にもなれずに終わったヴィルトガンスの生涯を通観すると、そこにカトリックの民俗的要素が色濃く漂っているように思えてならないのである。それは、ヨーゼフ・ロートのような帝国の辺境からウィーンにやってきたユダヤ人青年にはないものである。それを明らかにするために、私は今、とんでもない回り道をしつつある。農民暦を読み解くなどと言いながら、これでは何も読み解いたことにはならない。書かれている言葉はたいしたものではないけれども、私のような「ドイツ文学者」がそう簡単に読み解けるようなものではないことを、今さらながら痛感している。しかしながら、これによって私の研究の方向性に、ほんの少しの展望が見えかかっていると、少なくとも自分では考えている。それはまだ、私自身の言葉としてこの世に生まれていない。言葉にならなければ、それはこの世に存在しないのと同じなのかもしれないが、カトリックの民俗的要素に触れてみると、言葉以前のもやもやとした何かがあるに違いないという確信のようなものを持ってしまう。

メーニヒキルヒェンから車で半時間あまり行ったフォーラウ Vorau に修道院[38]があり、ウィーン大学のピヒュル助教授に案内されてこの修道院を訪れた。ヴィルトガンスに関心を持つ日本人という特殊な存在であったことが幸いしたのか、一般には公開していないというカペレに入れてもらった。一般に公開していないことが幸いして、壁に描かれた地獄絵は、色鮮やかに残っていた。ヴィルトガンスの書いたもののなかには見当たらないが、メーニヒキルヒェンに来たときに彼は、この修道院にもよく足を運んだという。地獄に

堕ちていく七つの大罪を犯した人々の姿に、ヴィルトガンスは何を思ったかと想像すると、カトリックによる世界の救済という、アナクロニズムの理想主義者の顔が見え隠れする。しかしそれを笑い飛ばす権利を、二十世紀末に生きるわれわれのうちの誰が所有しているだろうか。

了

〔注〕

(1) Vgl. Der Fischer Weltalmanach 1998. Frankfurt a. M.: Fischer Taschenbuch 1997, S. 383.

(2) Roth, Joseph: Radetzkymarsch (1932). In: Joseph Roth Werke 5: Romane und Erzählungen 1930–1936. Hrsg. v. Fritz Hackert. Köln: Kiepenheuer & Witsch u. Amsterdam: Allert de Lange 1990, S. 139–455, S. 336.

(3) 臼井隆一郎『コーヒーが廻り世界史が廻る　近代市民社会の黒い血液』中公新書、一九九二年、二〇二頁以下参照。

(4) 拙稿：エルンスト・ヴァイス『目撃者』――父親の失墜とヒトラーの覚醒――（『埼玉医科大学進学課程紀要』第五号、一九八九年、九～十八頁）参照。

(5) 神野ゆみこ：「真理への殉教」――ローセガーの『ペーター・マイヤー』における嘘と真実――（平田達治監修『中欧――その変奏』鳥影社、一九九八年、四二三頁～四四三頁）には、たとえば、四三一頁以降に次のような記述がある。

「また作者は、この戦いが民衆のものであることを示すために、この地の民間信仰をも、意図的に作品に取り入れている。例えばペーター・マイヤーの妻の名は史実ではマリア・アンナであったのだ

が、作品ではノートブルガ（Notburga）に変えられている。ノートブルガとはティロールの聖女の名で、農家に雇われる少女や作男、農民の保護聖女であり、日曜日の安息の守り手とされて、インスタール地方でのみ信仰されている。

「さらにペーター・マイヤーの弁護人の姿は、ペーター・マイヤーの家の壁に描かれた聖マルティヌスを意識して描かれている。ペーター・マイヤーが処刑された直後、弁護人は聖マルティヌスと同様に馬上からペーター・マイヤーの遺体にマントをかける。聖マルティヌスはヨーロッパで広く信仰されているが、作者が特にこの聖人を作中に取り入れたのは、ペーター・マイヤーの家の外壁に聖マルティヌスが描かれていたからである。インスタールで信仰されているノートブルガやペーター・マイヤーの家に描かれた聖マルティヌスといった聖人、聖女を作品内に配すことで、作者は「民衆」の信仰のための「民衆」の戦いを、そしてティロールの戦いを演出しようとしたのである。」

(6) Vgl. Magris, Claudio: Der habsburgische Mythos in der österreichischen Literatur. Salzburg 1966.（邦訳：鈴木隆雄・藤井忠・村山雅人訳『オーストリア文学とハプスブルク神話』書肆「風の薔薇」、一九九〇年）

(7) Alter Bauernkalender für Tagesvorbemerkungen 1995. Graz: Leykam-Alpina 1995.

(8) 例えば、ナウマンは年中行事について、次のように総括している。

「一年の全行事暦は、一切のキリスト教の偽装をこえて、原始的な植物崇拝および家畜崇拝と関係づけられる。すなわち、一般にキリスト教の殻の下に、依然として、農業宗教がかくされているのだが、農業的な礼拝行為になっているまじない行為と関係づけられる。春の行事や秋の行事の背後には、太古の種まき行事、収穫行事があり、夏至の行事と冬至の行事は、大昔の種まきの祭り、芽ばえの祭りのようにも見えるし、棕梠の日曜日は、種まき祝いの清祓式にかわり、復活祭は種まき行列やそのほか種まきのまじないにかかわり、三王来朝日は、おそらく、昔の果樹のまじない行事の上に立っていると思われる。聖ゲオルゲ祭（四月二十三日）と五月一日は、うまや出しの行事であり、レオンハル

ト祭（十一月六日）とマルチン祭（十一月十一日）は、家畜の追いもどしの行事であり、聖霊降臨祭とマリア昇天祭（八月十五日）は、一部は大昔の羊飼いの行事らしい」（ナウマン、H.／川端豊彦訳『ドイツ民俗学』岩崎美術社、一九八一年、一五三頁以下）。

(9) Vgl. Österreich Lexikon in zwei Bänden. Hrsg. von Richard und Maria Bamberger, Ernst Bruckmüller, Karl Gutkas. Wien: Christian Brandstätter 1995, Band II, S. 93.

(10) Schmidt, Leopold: Volksglaube und Volksbrauch. Gestalten, Gebilde, Gebärden. Berlin: Erich Schmidt 1966, S. 30.

(11) 阿部謹也『甦える中世ヨーロッパ』日本エディタースクール出版部、一九八七年、一七頁。

(12) Swoboda, Otto: Alpenländisches Brauchtum in Farbe. München: Süddeutscher 1979, S. 15.

(13) Ebda, S. 26.

(14) Ebda, S. 100.

(15) 竹下節子『聖母マリア　〈異端〉から〈女王〉へ』講談社選書メチエ、一九九八年、一二九頁以下参照。

(16) 前掲書、一二七頁。

(17) Vgl. Pichler, Anton M./ Böhm, Wilhelm: Wege zu Hoffnung und Gnade. Österreichs Gnadenorte und Wallfahrten. Wien: Olga Nather 1953.

(18) Vgl. Schmidt, Leopold: a. a. O., S. 19ff.

(19) Vgl. Melchers, Erna u. Hans: Das große Buch der Heiligen. Geschichte und Legende im Jahreslauf. 8. Afl. München: Südwest 1985. なお、聖者伝のスタンダードとされているのはヴォラギネの『黄金伝説』で、これは邦訳も出ている（ヤコブス・デ・ヴォラギネ／前田敬作ほか訳『黄金伝説』全四巻、人文書院、一九七九年以下）。

(20) 「こうした修道院の日常的なほどこしとは別に、ヨーロッパ中で、盛大にパンがほどこされる特別な機会があった。不思議なことにこの習慣は、死者と密接な関係をもっているのである。そのほどこしの

行われる機会はまず、十一月一日の万聖節（聖人となった死者の日）と翌十一月二日の万霊節（一般の死者の日）、アメリカで言うハロウィンの日である。」舟田詠子『パンの文化史』朝日選書、一九九八年、二六二頁。

(21) 竹下節子『聖者の宇宙』青土社、一九九八年、四六頁。

(22) 前掲書、四七頁。

(23) Vgl. Attems, Franz/ Koren, Johannes: Schutzheilige Österreichs als Bewahrer und Helfer. Ihr Leben, ihre Patrone und Attribute. Innsbruck: Pinguin 1992, S. 88ff.

(24) Swoboda: a. a. O., S. 162.

(25) 竹下節子『聖母マリア〈異端〉から〈女王〉へ』一二五頁。

(26) 前掲書、一一九頁。

(27) 前掲書、一二〇頁。

(28) 「教会からの離脱者は年々増加の傾向にあり、ことに一九七〇年（この年カトリック約七万人、プロテスタント約二十万三千人が教会から離脱）以降はこの傾向が強い」（坂井州二『ドイツ民俗紀行』法政大学出版局、一九八二年、二七三頁）とあり、この本の著者自身も指摘しているが、カトリックに比してプロテスタントの教会離れがいっそう深刻である。

(29) 岡田芳朗『暦ものがたり』角川選書、一九八二年、参照。

(30) Sepp, Walter: Der steirische Mandlkalender. Ein Zeichen und Bilder. 3. Afl. Graz: Leykam-Alpina 1992, S. 7.

(31) Ebda.

(32) ロバート＝チェインバーズ／加藤憲市訳『イギリス古事民俗誌』大修館書店、一九九六年、三二三頁以下。

(33) 中森義宗編訳『キリスト教図像辞典』近藤出版社、一九七〇年、八一頁。

(34) Swoboda: a. a. O., S. 32.

(35) 日本聖書学研究所編『聖書外典偽典6　新約外典I』教文館、一九七六年。

(36) ジョン・ロナー／鏡リュウジ・宇佐和通訳『天使の事典　バビロニアから現代まで』柏書房、一九九四年、参照。

(37) Vgl. Schmid-Dengler, Wendelin: Das langsame Verschwinden des Anton Wildgans aus der Literaturgeschichte. In: Schmidt-Dengler/ Sonnleitner/ Zeyringer (Hrsg.): Die einen raus- die anderen rein. Kanon und Literatur: Vorüberlegungen zu einer Literaturgeschichte Österreichs. Berlin: Erich Schmidt 1994.

(38) この修道院の図書館に所蔵されている聖書の写本の一部がファクシミリで復刻されている。Vgl. Hutz, Ferdinand (Hrsg.): Die Vorauer Volksbibel. Faksimile-Wiedergabe aller 51 Seiten des Buches Exodus aus dem Codex 273 der Stiftsbibliothek Vorau. Graz: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt 1986.